

『子ども・若者の居場所の構想』 田中治彦 編著

古賀, 倫嗣
熊本大学教育学部

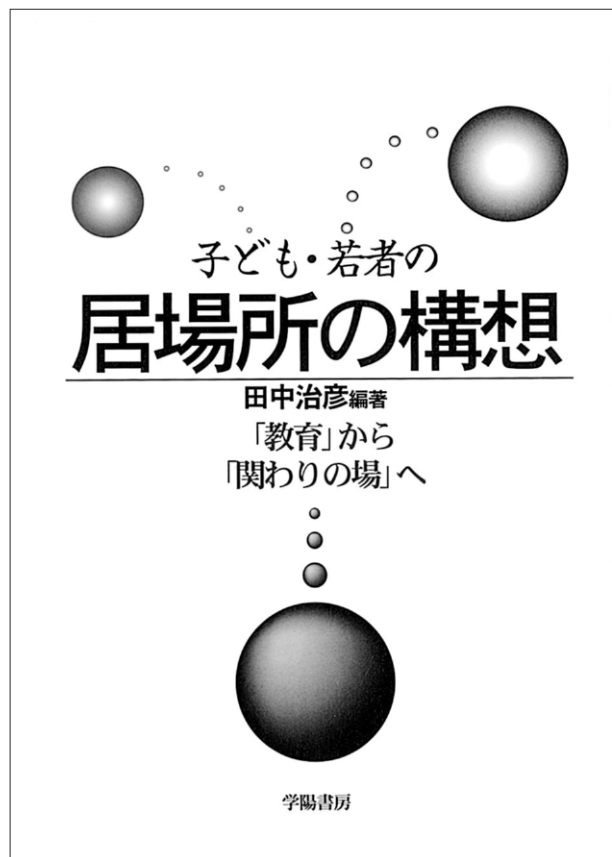
<https://doi.org/10.15017/9024>

出版情報：生活体験学習研究. 2, pp. 93-94, 2002-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：



『子ども・若者の居場所の構想』

田中治彦 編著



戦後少年非行のピークを記録し、「子ども」論の必需品、ファミコン・ゲームが発明された1983年に生まれた子どもが14歳になったとき、「十四歳問題」が社会を震撼させ、17歳のときには再び「十七歳問題」として衝撃を与えた。キーワードは、「キレル」と「心の闇」である。子ども問題に関心を持つ多くの人たちが、どのように子どもに関わったらよいか、不安と無気力(と絶望)を感じている。2002年度から施行される「新学習要領」もその特効薬ではなく、「子どもを地域にかえす」ことの真の意味が問われている。

そうしたなか刊行された本書は、「子ども・若者にとって『居場所』とは何か」「子ども・若者の生活空間はどう変わったか」「居場所の構想—その方法と課題」の3部から構成され、まさに時宜を得た出版となっている。

編者の田中は、序章において「『教育』『育成』『指導』から『関わり』と『参画』への発想の転換」が出発点と述べ、「居場所」には、「関わりを創り出し、つなげ、発展させる『指導者』」、「若者が『居場所』と感じられる空間」のデザイン、そして行政と市民との協働の3つのポイントが必要と提案しているが、これが本書を貫く基本的な視点である。ここで、「居場所」とは、執筆者の一人、萩原健次郎によれば、次のようにまとめられている。(本書63頁)

- ① 居場所は、「自分」という存在感とともにある。
- ② 居場所は、自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれる。
- ③ 居場所は、生きられた身体としての自分が、他者・事柄・物へと相互浸透的に伸び広がっていくことで生まれる。
- ④ 同時にそれは、世界(他者・事柄・物)の中での自分のポジションの獲得であるとともに、人生の方向性を生む。

とはいえ、不断に「関係の喪失」に向かうのが現代社会である。萩原によれば、居場所を失っていると感じている子どもに必要なものは「彼らの自明性を支える」こととされる。「『自分』を自ら安心して世界に開き、徐々に他者や事柄、物へと住み込んでいけるゆとりと、自分と他者との相互承認体験を積み込んでいく機会」が重要なのである。

そして、その具体的な機会が、「まちワーク」や「プレーパーク」などの場にほかならない。

まちワークのねらいは子どもの遊び環境をコミュニティ単位でトータルにとらえることと同時に、環境改善運動の主体として保護者を位置づけたことにある。これに対し、1979年東京・世田谷に誕生した羽根木プレーパークは、「自分の責任で自由に遊ぶ」というスローガンで有名だが、それが公園改善運動から一歩進んで「子どものための遊び空間」を創出したことが評価されている。

ただ、今振り返ってみるとき、「国際児童年」であったこの年は、高校1年生が祖母を殺害後自殺した「朝倉少年事件」から始まり、小学4年生が2年生をマンション屋上から転落死させた「靖子ちゃん事件」で終

わるまでに、小学生を「殺人者」とする事件が連続して3件発生した年でもあった。それから20年たって、私たちは「十七歳問題」に驚愕し続けている。あらためて、問題の根深さを痛感する。それを、「『健やかな子ども』というイメージにたいしての子どもたちからの反乱」としてとらえていいものか、それとも「健やかさ」という枠組み（健全育成パラダイム）の強化・再編をはかるべきなのか、問題状況はいつそう錯綜し、共通の合意は生まれえないままになっているといえよう。子どもたちに「関わる力」をつけること、言い換えればエンパワーメントは、どのようなプロセスで可能なのか。「健全育成」枠組みの有効性は失われたものの、それに代わる「関わりのパラダイム」はいまだ見えない。本書で田中たちが主張する「『関わり』と『参画』」は、こうした子ども問題の厳しさのなかで検証される必要がある。まさに、「学校・地域・家庭という130年来変わらない子どもの三層生活の領域構造」の内実が問われているのである。

「子どもは関係のなかで発達する」が、かつて「自己発達の場」であった遊びが居場所にならなくなっている現実のなかで、「メディアが埋める現実空間の欠落」の問題がきわめて大きくなっていることはいうまでもない。ケータイ電話やインターネットを媒介とする「バーチャルな関係」は、個性的な社会関係を「普遍化」し、それゆえ「通分」することにより「友人関係」が偽造される。「ベル友」「メル友」といった、この10年の子どもたちの社会関係のあり方は、一方で田中がいうように「集団から離れる子どもたち」を生み、他方では必ず同時に「バーチャルな集団関係に依存・包

摂された子どもたち」を再生産せずにはいない。

評者は、社会学を専門とする者であるが、本書全体を貫くトーンとして「『願い』や『思い』から出発する教育学的視点の強調という感想を強く持った。それに対し、社会学は「現実の厳しさ」や「人間の暗部」「地下世界」に視座を置き、それを肯定することから出発する。社会学は、研究・分析はしても、価値判断は行なわない。例えば、本書でしばしば引用されている社会学者の一人が宮台真司であるが、彼の「コギャル」論（カラダを売るコギャルとそれを買う社会学者）と、「ジェンダーの視点からみた若者の居場所―「女のコ」文化をめぐる」の執筆者、矢口悦子の枠組み（「女性差別」論）とを比べたとき、大きな「ギャップ」が2つの科学の間に広がっていることに気がつくだろう。

そうした、子どもたちへの「接近」の差異と不協和を感じさせながらも、本書が取り組もうとした基本的な課題、子ども問題の解明とパラダイム転換は、きわめて示唆的であった。また、丁寧につくられた巻末の参考文献、関係年表は、研究者だけではなく、子ども問題に真摯に取り組んでいる実践家やサークル関係者にも役立つものである。次代を担う子どもたちの「生きる力」の育成が大人の責任であることはいうまでもないが、それ以上に私たち大人が、ワクワクドキドキできるだけの感性、他者に関わる力を持っているかが試されている。そうした確かな読後感を与える、労作である。

[学陽書房、2001年、3000円]
(熊本大学教育学部 古賀 倫嗣)